巻頭言

渇きを潤すところ

「私が与える水を飲む者は決して渇かない」（ヨハネによる福音書 4:14）



立教大学チャプレン　藤田　誠

今年も暑い夏がきましたね。かつて、宅配便のアルバイトを夏場にしていたとき、あまりの暑さで脱水症状となり、配達先で体が思うように動かなくなったことが一度あります。見るに見かねたお客様がコップに一杯、水を自分に差し出してくださり、この水のおかげで、少し、体が回復をし、助けられた思い出があります。このとき、水は人間にとって無くてはならないものなのだとあらためて感じました。

冒頭の聖句はイエス・キリストがサマリアの女性に言った言葉です。イエス・キリストが人々へ与える水は命の水となり、人々の内側より泉のように尽きぬ命として湧き出るということをイエスはサマリアの女性に語ります。

さて、立教大学では池袋キャンパスと新座キャンパスにあるそれぞれの礼拝堂で学期中は毎日、礼拝が献げられます。この礼拝は学生に限らず、教職員、地域の方々などすべての人々に開かれています。池袋礼拝堂で午前７時から献げられる聖餐式（イエス・キリストが定められた感謝・賛美の祭りであり、イエス・キリストの十字架の死と復活、昇天、聖霊降臨を記念する礼拝）、日々の生活を神と人のために覚える「朝の祈り」「昼の祈り」、そして、英国国教会伝統のイーブンソング（礼拝の多くの部分が歌で構成されている）に倣った「歌による夕の祈り」です。もちろん、日曜日も「日曜学校さゆり会」による子どもを対象とした礼拝、そして、礼拝堂の信徒の方々と学生キリスト教団体（チャペル団体）に連なるアコライト・ギルド、オーガニスト・ギルド、聖歌隊、ハンドベルクワイアの学生達による礼拝奉仕によって聖餐式が献げられています。この他、クリスマス・イブ礼拝、ウィリアムズ主教記念日礼拝のような学院行事としての礼拝、入学礼拝、卒業礼拝などの大学行事としての礼拝、サークルの合宿出発礼拝、体育会各部のユニフォーム祝福・授与式、役員任命式など学生からのリクエストによる特別礼拝など、池袋礼拝堂（立教学院諸聖徒礼拝堂）、新座礼拝堂（立教学院聖パウロ礼拝堂）では多くの礼拝が一年を通して献げられています。

学院並びに学校行事としての礼拝や学生からのリクエストによる特別礼拝、「昼の祈り」のメッセージをチャペル団体と体育会の学生が担う「学生は語る」、そして、日曜日に献げられる礼拝を除いて、平日の「聖餐式」「朝の祈り」「昼の祈り」の参列者は一年を通じて、「聖餐式」は数人、「朝の祈り」は十人前後、「昼の祈り」は十数人です。「聖餐式」は午前７時からなので数人の参列者も頷けますが、「朝の祈り」と「昼の祈り」は池袋キャンパスと新座キャンパスを合わせた約２万人という学生数を考えると少ないと言えるでしょう。

キリスト教の信徒であるなしに関わらず、人は礼拝を通して、イエス・キリストから命の水を頂いて、魂の渇きを潤す体験があるように思います。



池袋礼拝堂の参列者用の長椅子

「朝の祈り」は始業前、「昼の祈り」は昼休み中なので、学生にとっては、それぞれの準備や休みを取る貴重な時間に当たります。その貴重な時間をそれぞれの魂の渇きを潤すところとして「朝の祈り」

と「昼の祈り」の機会はなっていないと、厳しく振り返るならば言えるでしょう。それは、なぜなのでしょうか？また、チャペル団体の学生は、自分達が奉仕する礼拝以外の礼拝へ参列して、それぞれの魂の渇きを潤す体験はしているのだろうか？そのように感じるこの頃です。実際には、学生のみなさんへこのことを聞いたことがないので、礼拝参列者数の統計を踏まえた個人的な推測の域は出ないのですが、彼らが礼拝を通してイエス・キリストから渇くことのない命の水を頂く体験をしてもらえたらよいなと思います。

私がなぜ、このような話をするのかと言いますと、フランスのエキュメニカル（キリスト教超教派）な修道会であるテゼ共同体が毎年、年末から年始にかけてヨーロッパ（毎回、大会終了時に次回の開催国が発表されます）で開催している大会（世界各国の 35 歳以下の青年、約 10 万人が参加する黙想と祈りの集い）に一度、参加した経験があり、多くの青年が魂の渇きを癒やすために（自分もまた）大会に来ていたからでした。



2010 年末に行われたテゼのロッテルダム大会

テゼ共同体は 1940 年夏、スイス出身のブラザー・ロジェがフランス、ブルゴーニュ地方にあるテゼ村でナチスから逃れてきたユダヤ人難民を迎え入れて匿い、戦争によって分断されたキリスト者たちを癒やすための道として、また、「和解のしるし」としての共同体を模索したところから始まります。徐々にブラザー・ロジェに共鳴するブラザーが加わり、1949 年、「和解のしるし」の共同体は「テゼ共同体」として修道生活を送るようになりました。その後、ブラザーたちはアジア、アフリカ、南北アメリカなどの政情が不安定で貧しく抑圧された人々の中へ積極的に入ってゆき、苦しんでいる人々と連帯してゆきました。

そして、1957 年以降に世界各地から青年がテゼに訪問するようになり、一週間単位で 6 千人規模の青年達が共同生活を送りながらブラザーたちの祈りへ参与してゆきました。

世界各地からさまざまな言語の青年達が一緒に祈るにはどのようにしたらよいのか？ブラザー・ロジェは考えました。そこで、彼が思いついた祈りが、短い聖書の言葉を繰り返し歌い祈る方法でした。言語はラテン語、スペイン語、ドイツ語、英語などさまざまです。そして、「沈黙」の時間です。この黙想と祈りの方法が青年達の魂の渇きを癒やす体験となりました。祈りの参加は初めからでも途中からでも構いません。そして、歌は特に回数を設けず、何回も歌い、自然と歌い終わります。これらの営みは「地上における信頼の巡礼」とブラザー達は位置付けます。

また、この巡礼は年末年始にかけて開催されるヨーロッパ大会にも繋がり、大会運営はテゼ共同体でブラザー達と青年達が共同生活をして、そして、歌による祈りと沈黙を中心にした方法（聖書朗読、共同祈願、ブラザーによるメッセージもあります）で行われます。

私は東京の聖公会の教会やカトリック教会で開催されていた「黙想と祈りの集い」（テゼの歌を用いた祈りの集い）に 30 代の頃に参加したのがきっかけで、2010 年末にオランダのロッテルダムで開催されたヨーロッパ大会へ参加しました。

ロッテルダム大会では、今、立教大学に在籍している年頃の青年達がリラックスをして祈りの集いに参列している様子を見て、また、自らもその祈りを体験して、礼拝とは魂の渇きを癒やす体験なのだなと初めて感じました。

立教大学の「朝の祈り」と「昼の祈り」という限られた時間でテゼ共同体のような祈りのスタイルを持つことは難しいのですが、学生達にとって魂の渇きを潤す体験ができるような祈りの機会を共に見つけられたらと願っております。